

広げよう福祉の輪！

三徳だより

100号記念号

2019年（令和元年）夏・秋
発行：社会福祉法人三徳会



特別養護老人ホーム 成幸ホーム・在宅サービスセンター・在宅介護支援センター・ショートステイ
〒142-0053 品川区中延1-8-7 TEL.(代)03-3787-3616 FAX.03-3783-6580 santoku-seikou@ap.wakwak.com

品川区立戸越台特別養護老人ホーム・在宅サービスセンター・在宅介護支援センター・ショートステイ
〒142-0041 品川区戸越1-15-23 TEL.(代)03-5750-1054 FAX.03-5750-1055 santokukai.togoshi-h@proof.ocn.ne.jp
杜松在宅介護支援センター <http://www.togoshiginza.net/togoshi/machi/topics/topics.cgi>
〒142-0042 品川区豊町4-24-15 TEL.(代)03-5750-7707 FAX.03-5750-7709

品川区立荏原特別養護老人ホーム・在宅サービスセンター・在宅介護支援センター・ショートステイ
〒142-0063 品川区荏原2-9-6 TEL.(代)03-5750-2941 FAX.03-5750-3695 santokukai@aw.wakwak.com
小山台在宅介護支援センター
〒142-0061 品川区小山台1-4-1 TEL.(代)03-5794-8511 FAX.03-5794-8512

品川区立平塚橋特別養護老人ホーム・ショートステイ
〒142-0063 品川区西中延1-2-8 TEL.(代)03-5750-3632 FAX.03-5750-3642 hirataka-ow01@santokukai.com

品川区立小山在宅サービスセンター「小山の家」
〒142-0062 品川区小山7-14-18 TEL.(代)03-5749-7251 FAX.03-5749-7252
小山在宅介護支援センター TEL.(代)03-5749-7288 FAX.03-5498-0646

「三徳だより」100号までの道程



社会福祉法人 三徳会
理事長 内野 滋雄

三徳会設立の頃

三徳会を設立し特別養護老人ホーム（以下特養）を作った動機は一口に言えば人助けのため、独り暮らしが困難な高齢者のためでした。そのような高齢者の施設は養老院と呼ばれ、住み慣れた所ではなく多くは遠く離れた所でした。

高齢者にとっては知り合いが多く、寂しくないところが理想的な住み処です。外国特にヨーロッパでは住み慣れた町中に特養があります。そこには元気な独り者の高齢者が多く、夕食には盛装してワインを楽しみ、入所者同士の交流が盛んでした。地下には診察室、小手術室、病室もあり、至れり尽くせりでした。

日本でもそのような都市型の特養を作ろうと思ひ東京都に相談しましたが、「都市型の特養は都としても欲しいが町中では反対者が多く無理です。地下の診察室や病室は認められない」とのことでした。

町中で反対者が多いのは、高齢者施設は臭い、年寄りが道に出てくると危険、商店街の地価が下がる、ということが都の話でした。

私は中延商店街の役員会（月1回、夜8時ごろから約1時間）に2年程出席させていただき、今後の高齢者の増加、働き手が介護に廻ることの問題など、新しい特養のあり方などを説明し、皆様の賛同をいただくことが出来ました。地元のご理解、ご協力には今でも感謝と御礼の気持ちを持ち続けております。

昭和57年3月に社会福祉法人三徳会の設立許可があり、同年11月8日に成幸ホームがオープンしました。当時は入所希望者が600名もおられ、80名定員の成幸ホームは職員の大きな努力で約2ヶ月で80名の入所が終わりました。

三徳会の基本精神による歩み

三徳会のミッションは「正義・友愛・奉仕」であり、「福祉はサイエンス」が福祉全体、仕事全

体に関するの基本です。間違ったことはしない、皆仲良くしよう、人のために尽くすことを忘れないで頑張ろう。そして老化を科学的に考え理解して行動しよう。サイエンスは日進月歩するものであり、前の日まで正しいと信じていたことが次の日は否定されることも多いのです。そのため日々学びの精神を忘れないことが必要です。高齢者は一瞬にして変化することも多いため職員はその事を理解し、考え、ご家族に説明することが必要です。

特養は生活の場

特養は生活の場ですから本人の自由と自己責任も重要です。成幸ホームでは古くは元気に歩く方が多く、夕食では晩酌を認めていた時がありました。ビールは小瓶1本、日本酒は1合までとしましたが、楽しそうに盛り上がりおりました。現在では寝たきり、認知症、各種の慢性疾患など特養入所の限界を超えている入所者が極めて多くなっております。腎不全で透析が必要な方、経管栄養の方も入所され、すぐに入院という重症者も多数おられる昨今です。

職員は本当に大変です。特養の本来の姿が生活の場であることを考え職員の夢を叶えられる制度に立ち戻らなくてはなりません。

本誌の100号に当たり、これからも4施設が年1回は当番として「三徳だより」を刊行していただきたいと切望しております。それは仕事の実情、その問題点を社会全体の問題として多くの方に知っていただきたいからです。そして職員の希望や夢を前向きな姿勢で成幸、戸越台、荏原、平塚橋の4施設がそれぞれの特徴を生かし編集して欲しいのです。投稿者は入所者と家族、ボランティアの方々、行政の方、業者、職員と家族、三徳会の評議員、理事、監事など多方面の方々にご投稿願いたいと思っております。

100号に到達するまでよく頑張ってくれた人々に深く感謝しています。ありがとうございました。

「三徳だより」創刊の思い出

今を遡ること25年前。「三徳だより」の創刊は平成6年の夏でした。当時の誌面はワープロの文字を切り貼りして、色紙にコピーするという手作り感があふれるものでした。

試行錯誤しながらもおかげさまで100号。創刊時に思いを馳せて、企画から誌面作りまで携わった職員が振り返ります。

戸越台ホーム
菅井 明宏

「三徳だよりが100号を迎えるので、創刊号を作った人としてひと言書いて欲しい」との依頼を受け、長い月日の流れを感じながら、「25年もよく続いたものだ」と驚きました。

私が三徳だよりの創刊にかかわるようになったのは、「うちでやっている活動を地域に発信する広報誌を作りたいんだけど、あなたやって下さない？」という、当時の成幸ホーム長（現総施設長）のひと言でした。成幸ホームで働いていた私は、特に断る理由も見つからず担当することになりました。

創刊にあたっては、新しい媒体のため、まず媒体概要を決めることから始まりました。

媒体名は「三徳だより」。確か成幸ホーム長による、思いのこもった命名ではなかったかと思えます。発行は季刊で年4回。当時はほぼ手作業で原稿や写真を切り貼りしながら作らなければならなかったため手間がかかり、3か月に1回の発行でも大変だと思いましたが、情報発信の役割を考えれば、このぐらいの頻度は最低限必要であると思われました。掲載する情報の量を考えると、誌面はA4サイズで8ページ。A3用紙2枚に原稿をレイアウトして、A3色画用紙の裏表にコピーして作っていました。掲載内容は、成幸ホームで行っている活動・事業の紹介を中心に、あまり堅苦しくならないように職員紹介やご利用者にまつわるコラム・4コマ漫画なども採用し、声をかけて集めた編集委員で取材や記事を分担しました。「三徳だより」の顔となる表紙の題字は、成幸ホームのご利用者にお願ひしました。その方は昔、看板の文字を描いていたという職人の方で、言わばプロ。そして表紙は、ご利用者の作品と俳句を載せて紹介することになりました。

この文章を書くにあたって、久しぶりに創刊号を目にしましたが、本当に素人が手作りしたとひと目でわかる代物です。しかし体裁はお粗末かも知れませんが、読み返してみると昔の仲間たちや

たくさんのご利用者との思い出が蘇り感慨深いものです。

現在の「三徳だより」はカラーで紙質もよく立派になりました。創刊から25年もの間、発行を続けるには非常に苦労も多かったと思いますが、継続して続けてこられたのは、まさに関わった人たちの努力の賜物だと感じています。

内野理事長は創刊号の挨拶で「この1号がさらに充実し、3施設の架け橋となることを願っている」と締め括っています。理事長や総施設長の思いを載せて、今や4施設の架け橋となり、三徳会の活動を地域に発信し続けた「三徳だより」。記念すべき100号までの発行に携わった全ての人たちの努力に感謝いたします。



こちらが「三徳だより」創刊号の表紙です。今回、100号記念号の発刊に至るまでには、本文中にもあるようにたくさんの方の尽力がありました。利用者の思いや職員の思い、ボランティアさんなど三徳会の運営に協力してくれている方々の温かいメッセージもありました。今後も皆さんの歩みや思いを引き継いで作成していきます。

成幸ホーム 福崎 アサノ 様 (100歳)

この度100歳を迎えられた福崎アサノ様のご家族様にお母様のエピソードをつづっていただきました。

雪深い新潟県十日町市に生まれました。学校卒業後、京都に行き機織りを覚えました。朝早くから夜遅くまで働く仕事は、親に駄々をこねて行かせてもらったにも関わらずホームシックにかかり、毎晩泣いて過ごすほど、とても辛い仕事でした。

数年後に新潟に戻り25歳で結婚。しかし、すぐに夫は出征し、終戦一年後に帰国。その後は、昼は農作業、夜は機織りする生活で3人の子供を育てました。

家で飼っている蚕に桑の葉を与え、まゆを出荷。機織りは残りのまゆで絹糸を紡ぎ手織りをしていました。ある時からモーターの機織りに代わると1か月に十数本の反物を織ることができるようになり、本数の多さは自慢でもありました。

山の中の米農家は体にきつく、機織りの仕事は繊細で気を使います。冬の雪下ろしも体力が必要でした。でも、これらを乗り越えてきたからこそ100歳を迎えることができたのかなあと思います。もちろん、辛いことばかりではなかったです。北海道や九州へ旅行に行ったことも良い思い出です。

90歳の時に夫が他界し、ひとりで屋根に登り、雪下ろしをするのは危ないと91歳の時に娘の住む東京に連れてこられました。娘婿さんや孫たちが温かく迎えてくれました。ひとりの生活から大勢の生活になり、とても楽しかったです。

2年半前にホームに来てからも皆さんに良くしていただいて本当に感謝です。ありがとネ!



特集 敬老のお祝い

荏原ホーム 曾根 アヤ 様 (100歳)

100歳のお祝いを受けられた曾根アヤ様にお話を伺いました。

曾根様は北海道日高郡のご出身で、3人兄弟の長女として生まれました。

子どもの頃の思い出は手づくりのお手玉で、小豆の中に鈴を入れるといい音が出て楽しく遊べたそうです。お父さんが早くに亡くなられてからは、随分と苦労され磁石で古釘を集め、それを売って生活費に充てたり、弟を東京の大学に行かせるため郵便局の交換手をされるなど家族のためにさまざまな仕事をされました。

結婚のため上京したときは旦那さんの顔もわからず、お姑さんとの同居生活も不安で泣きながら故郷を後にしたとか。その不安が的中したのかお姑さんはとても厳しい方で、結婚して3日目より働くようにと言われ、家事の傍ら和裁をしました。また、近所の会社に勤めたときはお姑さんから「お昼ご飯は家でとるように」とお達しが出ました。ご飯を食べ終わり会社に戻るまでの時間に、家でひと仕事ができるという理由からです。「本当は同僚とおしゃべりをしながらお弁当を食べたかった」と当時のことを思い出して話されました。

子育て中にも苦労はあったようですが、どんな子どもにも優しく見守り続けたところ、道にそれることなく立派に成長したとのこと。その優しさはどこからくるのですか、と伺ったところ「苦労してきたから、人に優しくできるんだよ」と照れながら答えてくれました。最後に100歳を迎えた感想を伺うと、「母親は104歳で亡くなったので、それを超えるまで生きるのが目標よ」と仰っていました。いつまでもお元気でいてください。



戸越台ホーム 末廣 ふさ江 様 (100歳)

末廣ふさ江様ご長女の歌代隆枝様にお母様についてお話を伺いました。

私は父の出征中に生まれたので、元気にしっかり育つようと父の名前から一文字「隆」を取ったと聞いています。人からは、女の子にはあまり使わない字とよく言われます。

母は静岡の商家で7人兄弟の4番目として生まれ育ち、女学校を卒業したそうです。よく一里の道を歩いて通ったと言っていました。

父の実家も静岡ですが、東京でお茶屋をしていたので、母はそこで少し手伝いをしたようです。店で遊んだ記憶はお茶の香りとともに残っています。本来母は身体が弱かったので、東京に来てからは、洋服を縫ったり、庭の手入れをしたりと専業主婦として家で過ごすことが多かったです。休日に遊園地やデパートに連れて行ってくれるのは父で、父が生地を選んで、母が三姉妹の服をせっせと縫ってくれました。洋裁の基礎は母に習いました。春と夏には家族旅行に連れ出しましたが、母は「私は田舎者だから」というのが口癖で、家で過ごすことを好みました。私の会社に書類を届けてもらうことがあったのですが、電車の乗り換えや道順を一つひとつ教えないければ、たどり着けなかった母でした。

私と次女が嫁ぎ、末の妹と長年暮らした母ですが、突然妹が亡くなり、私が母を見ることになりました。子を亡くすということは、親にとっては一番辛く、切ないことでしょう。毎年、父と妹の眠る鎌倉へ母を連れて墓参りに行っていますが、ここ数年は大変になって来ました。

悲しみや苦しみを乗り越えた母が残された時間を穏やかに、自然に、母らしくゆったりと過ごして欲しいと願うばかりです。



平塚橋ホーム 北村 弘 様 (99歳)

いつも面会にいらしているご長男様にお話を伺いました。

父は戦後に豊町に引っ越してきて、プレス業を始めました。運がいいのか、朝鮮特需もあり商売はうまくいっていたようです。起業したプレス業が軌道に乗ると、岩手県や宮城県に、集団就職の募集をしに行っていました。多い時には家に8人くらい住み込みで雇っていて、小さかった私の遊び相手になってくれました。

40歳くらいになると「おいらく山岳会」のリーダーとなり、週末のほとんどは日本中の山巡りに勤しみ、お正月も初日の出を見に行っていました。そんな父から、高校1年の時に「夏休みにヨーロッパに行ってみないか」と誘われ、北欧からドイツやギリシャを通してエジプトに行きました。当時は海外旅行が気軽に行ける時代ではなく、ヨーロッパに行ったことのある友達はいなかったの、ありがたく、楽しかった思い出です。

山登りがだんだんきつくなった70歳の頃からは、世界中のあちこちを旅するようになりました。カナダ、ヨーロッパ、エジプト、ニュージーランド、オーストラリア、台湾など、多い時には年に2回も行っていました。韓国では朝鮮人参を買ってきて朝鮮人参酒を造り、寝酒の一杯をショットグラスで嗜んでいました。父は「これを飲んでいるから心臓が強いんだ。俺はなかなか死なないかもしれないぞ」と言っていたのが印象的です。家には父親特製の朝鮮人参酒があと6本あり、中には8年物もあるので売ったらいい値がつくかも? と妻と話しています(笑)。

父は来年の2月で100歳になります。祖母も100歳まで生きたことを思うと長寿の家系なのかもしれませんね。



三徳会の4つの特養ホームでは9月9日に敬老式典を行い、「米寿」、「卒寿」、「白寿」、「百歳」、「百歳以上」のご利用者をお祝いしました。

ご家族もご参加いただき、様々な人生を送って来られた皆さまへの敬意と感謝の気持ちに包まれていました。

今回、お祝いの方々の中から各施設おひとりずつに、今までの人生の思い出などについてお話をうかがいました。

※各施設のお祝いの方々の人数は表のとおりです。

	米寿(88歳)	卒寿(90歳)	白寿(99歳)	新百歳	百歳以上
成 幸 (定員 80)	4	9	3	2	5
戸越台 (定員 72)	8	2	4	2	8
荏 原 (定員120)	9	7	5	4	6
平塚橋 (定員100)	9	9	4	2	2

情報公開について

三徳会では、地域の皆様方および関係する方々に三徳会に対するご理解ご協力をいただくため、平成30年度の決算の概要と事業報告を公開いたします。

紙面の関係からお知らせする内容は、概要のみとなっておりますが、詳しくお知りになりたい方は各施設の窓口にお申し出ください。

1. 平成30年度決算の概要 (平成31年3月31日現在)

① 貸借対照表

(単位：円)

資 産 の 部		負 債 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
流 動 資 産	1,374,663,558	流 動 負 債	173,888,755
固 定 資 産	2,517,303,535	固 定 負 債	171,633,343
		負 債 の 部 合 計	345,522,098
		純 資 産 の 部	
		基 本 金	473,161,831
		国庫補助金等特別積立金	174,132,639
		そ の 他 積 立 金	1,253,499,095
		次期繰越活動収支差額	1,645,651,430
		純 資 産 の 部 合 計	3,546,444,995
資 産 の 部 合 計	3,891,967,093	負 債・純 資 産 の 部 合 計	3,891,967,093



② 財産目録

資産の部

負債の部

(単位：円)

資 産 の 部		負 債 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
流 動 資 産 合 計	1,374,663,558	流 動 負 債 合 計	173,888,755
基 本 財 産	819,460,765	固 定 負 債 合 計	171,633,343
そ の 他 の 固 定 資 産	1,697,842,770		
資 産 合 計	3,891,967,093	負 債 合 計	345,522,098
		差 引 純 資 産 合 計	3,546,444,995

③ 事業活動計算書 (社会福祉事業区分)

(単位：千円)

科 目	本 部	成 幸	戸 越 台	荏 原	平 塚 橋	合 計
サービ 活動 収益 計	3,015	522,658	664,373	947,495	601,507	2,739,048
サービ 活動 費用 計	30,383	541,893	645,603	908,583	538,150	2,664,612
サービ 活動 増減 差額	△ 27,368	△ 19,234	18,769	38,912	63,357	74,436
サービ 活動 外 収益 計	48	730	907	921	161	2,767
サービ 活動 外 費用 計		15	48	117	61	241
サービ 活動 外 増減 差額	48	715	859	804	100	2,526
経 常 増 減 差 額	△ 27,321	△ 18,519	19,628	39,716	63,458	76,963
特 別 収 益 計	0	1,654	42,650	90	27	44,421
特 別 費 用 計	△ 1,054	1,593	44,306	401	0	45,246
特 別 増 減 差 額	1,054	61	△ 1,656	△ 311	27	△ 825
当 期 活 動 増 減 差 額	△ 26,267	△ 18,458	17,972	39,405	63,485	76,134
前 期 繰 越 活 動 増 減 差 額	41,908	699,074	282,365	363,751	126,656	1,513,754
当 期 末 繰 越 活 動 増 減 差 額	15,641	680,617	300,338	403,157	190,140	1,589,893
そ の 他 の 積 立 金 取 崩 額						0
そ の 他 の 積 立 金 積 立 額						
次 期 繰 越 活 動 増 減 差 額	15,641	680,617	300,338	403,157	190,140	1,589,893

- 三徳会では、法人が実施している社会福祉事業の財政状態、事業活動の成果及び収支の区分を報告するため、社会福祉事業区分を設定し、法人本部、成幸、戸越台、荏原、平塚橋の5拠点区分に分類しています。
- 千円未満を四捨五入して関係で縦、横の合計が一致しないものがあります。
- 詳しくお知りになりたい方は、各施設の事務室にお尋ねください。

※注1)平成24年度より会計基準を指導指針から社会福祉法人会計基準へ移行しています。

成幸ホーム

岡本 翔子

私は成幸ホームに入社して7年が経ちました。入社当時は、職員の数も今よりは多く外出やレクリエーションなど、ご利用者のために余暇の時間を作ることができていました。時間を見つけては気軽に散歩行くことができ、ご利用者の笑顔が多かったと思います。

しかし、現在の介護業界は多くの課題があり、成幸ホームにおいても多様な事柄を解決することが増えたため、外出援助やレクリエーションを行うことが難しくなってきました。ですがそんな時こそ日々ご利用者に少しでも日常を楽しんでいただけるようにと、職員間で話し合い業務の工夫を検討しています。

その結果、夏はベランダにプールを置き、足だけですが水遊びや、かき氷づくりを行い楽しんでいただくことができました。できることは少ないかも知れませんが、今後も職員同士で話し合い、工夫して行くことで限られた職員でもご利用者の満足度が上がるように努力しようと思います。

荏原ホーム

瀧澤 政明

今後の介護においては、高齢者の増加、介護人材の不足という問題が懸念されています。そのため、利用者の生活を支えていくためには、マンパワーに頼るだけではなく、さまざまな技術や機器を取り入れ、それを有効に活用していく必要があります。また、介護人材の不足については、介護の「きつい仕事」「大変な仕事」という負のイメージを払拭していくことが大切だと思います。

介護は大変な部分もありますが、利用者の生きがいや生活を支える尊い仕事です。それに利用者それぞれの思いを汲み取り、その思いを実現できたときの達成感や喜びはとても大きいものです。

今後、介護に携わる人がやりがいや楽しさを感じることができ、それがよりクローズアップされることが、とても重要になってくるのではないのでしょうか。そのような思いを少しでも伝えていけるよう、今後も引き続き努力していきたいと思っています。

戸越台ホーム

桐山 知久

少子高齢化の波が打ち寄せ、今後も介護が必要な高齢者は増加していきます。業界全体での人材不足の影響があり、今は介護の未来は決して明るいとは言えないかも知れません。

IT機器を活用した介護業務負担軽減などあらゆる企業が乗り出し人材不足を補おうとしていますが、他業種に比べ、介護の機械化には厳しい面を感じます。人が、人を想い、人に寄り添うことは人にしかできないと思います。

ご利用者一人ひとりの生活を、必要な時に必要なことを支援するため、肉体・頭脳・感情を駆使し、私たちは従事しています。そして地域のボランティアの力は、ご利用者だけではなく、職員にとっても欠かせない存在となっています。

介護職に対する地位の低さや、処遇の改善が見直される日がくれば、未来は拓けてくると思います。そのためには、仕事に対する誇りを持ち、自らのスキルアップを目指すこと、誰もが必要とされる人材であることが大切だと考えます。

私が考える これからの 介護

平塚橋ホーム

大和田 睦子

平成28年5月より平塚橋ホームにて、開設時から担当しているユニットでの勤務が早いもので、今年で4年目になりました。その間、看取りケアも何度か経験し、ご利用者の人生の最後をサポートすることについて考えました。グループホームでは看取りケアはなく、病院に搬送され最後の様子は、ご家族からの連絡で知ることがほとんどでした。入所中は精一杯、ケアしていますが「まだできることがあったのではないかと」連絡を受けるたびに思っていました。

私達介護職員にとって、施設入所されたご利用者と過ごす時間は、ご家族より多くなると思います。私が考える看取りケアは、終末期が近づいているご利用者に、ご家族や慣れ親しんだ職員が寄り添うことによって少しでも身体的・精神的苦痛を和らげ最期に至るまでの時間を幸せにするケアだと思っています。これからもそんなケアを続けていきたいと考えています。



「高齢者と介護者のための料理教室」

いまむかし



平塚橋ホーム
管理栄養士

藤原 記代子

昭和63年11月21日にスタートした「高齢者と介護者のための料理教室」は、令和元年9月24日開催で第155回を迎え、32年目という長期継続事業となりました。

事業開始にあたり品川区・品川保健所・品川総合福祉センター・福栄会・品川栄養士会に相談し、ご協力をいただきながら、区内施設の持ち回りの開催でしたが、その後、当法人のみとなり現在に至っています。当時は品川区全域とし、材料をコンテナに詰め、区内の会場を行脚して回りました。

介護保険も創設されておらず、特別養護老人ホームや在宅サービスセンターなどもあまり知られていなかった時代です。法人は、「**地域に開かれた施設**」をモットーに「ランチタイムサテライト」や「地域交流会」「生と死を見つめる懇談会」など、品川区や関係機関の協力を得ながら先駆的な事業を展開していました。この料理教室もその一つです。

今でこそ、「介護予防事業」の一環として、さまざまな所で健康や疾病予防・介護予防を意識した料理教室が実施されていますが、そう考えると非常に先駆的で斬新な内容であったと、考案した

初代管理栄養士の先見性に敬服してしまいます。先駆的取り組みというものは、モデルがないので豊かな創造性と、また、どんな困難にも負けない強靱な心が必要です。

料理教室は、高齢者や介護者をはじめ、障害をお持ちの方や男性など、さまざまな方が参加され、年代も20～80歳代までと幅広く、リピーターの方がお友達を連れて参加され、この料理教室を通して交流の輪が広がっていきます。

この料理教室で出会ったことが交流のきっかけとなった方々、単純に料理作りを楽しみたいと思われる方、テーマに興味を感じ参加される方など、思い思いの目的で、今後も、この料理教室を「楽しみ」「活用し」「交流」していただければと考えています。

平成21年7月に第100回を迎えた際、『やさしい料理』という記念冊子を作成いたしました。7～8年後には、第200回を迎えます。この「高齢者と介護者のための料理教室」が地道に継続できた証として、記念となるイベントを準備していけたらと思っています。

新 しい時代とともに歩んでいきます

戸越台ホーム

～平成から令和にかけての大規模改修工事～

平成8年に開設した戸越台ホームは、中学校と合築した全国的にもめずらしい複合施設です。早いもので開設して20年以上がたち、設備や機器の更新等が必要となり、昨年8月より改修工事を行っています。工期は中学校と合わせると3年7か月におよぶ予定ですが、特養ホーム部分の工事は折り返し点を過ぎ、利用者の皆さまが新しい居室に移る日も間近になりました。

令和になって間もなくの5月にリニューアルが完了した9階の食堂・厨房、浴室の内装は、アイボリーを基調とし、床は木目を生かした明るい色調で、開放感あふれる空間となりました。新設した「だれでもトイレ」は地域の皆さ

まもご利用でき、車いすご利用者はもちろんのこと、赤ちゃんから高齢者まで利用が可能なベッドや障がいをお持ちの方（オストメイト）がストレスなく利用できる設備も完備しています。

また、機械浴室に設置した天井走行リフトは、ご利用者が安楽で安心してご利用いただける機器で、介護職員の腰痛予防対策にもなっています。

戸越台ホームの工事は令和2年8月に竣工予定です。新しい時代にふさわしく生まれ変わる施設にどうぞご期待ください。

